

現地を訪問して想うこと

難波博子 2011年法学部卒業

C 福島県コース参加

私は6歳の時に大阪で阪神淡路大震災を経験しました。

当時のことは今でもはっきりと覚えています。揺れが大きくて怖かったということ以上に、その後の生活がさらに大変でした。

神戸の街はもう綺麗に復興しましたが、洒落たレストランなどが震災を機に次々と姿を消したという話を聞いて今でも寂しい気持ちになります。

2010年、神戸旧居留地のオリエンタルホテルが震災から15年も経ってやっと再オープンを果たしたという広告を雑誌で読み、「こんなにも復興って時間のかかることなのだ」と痛感しました。「震災は起きた時より、その後が大変だな」と幼い頃から強く思っていました。

原発事故が発生した福島県のニュースは震災から3年7ヶ月経った今でも、全国放送で連日流れる状態が続いています。ニュースで聞くと、どうしても「遠い場所で起きている話」と思ってしまうがちですが、福島県在住の友人の話を聞き、福島県の今を是非自分の目で見てみたいと思い今回のツアーに参加することに決めました。

実際福島県に降り立ってみると、見た目では自然豊かで震災の爪痕感じさせるものは何も見当たりませんでした。

お天気にも恵まれ、五色沼の観光もすることができ、神秘的なミントグリーン色の沼を見て、感動しました。観光地には全国各地から観光客の方も来られていて、また地元福島県の方も沢山来られていました。

しかし、川内村長である遠藤さんを始め、現地の校友の方から福島県の現状を聞き、改めて問題が山積しているのだと痛感しました。米の放射線量の検査で全袋基準値以下を示しているのに、7割が市場に出回ることなく政府の備蓄米になっているそうです。市場で消費者に買ってもらうまでには物凄くハードルが高い状態だと聞きました。

私が興味を持ったのは川内村で見た植物工場の様子でした。出来たリーフレタスは、そのままサラダにして食べられるそうで、夕食会で戴きました。被害にあった村だからこそ、新技術をバネに発展してほしいと強く思いました。

私は、課題自体はこの先ずっと残ると思っています。しかし、日々人々が変化しているのも事実です。変化しているからこそ、福島の地に新しい風、新しい生活が訪れます。震災に遭った神戸でも今は私のお気に入りのお店が沢山でき、もう戻ることはないけれど、新しい魅力ある街になりつつあります。

次回来るときは、もっと福島県を楽しめるようになっていればいいなと思っています。「支援をしなければ」ではなく、福島県の魅力を感じてくれる人が増えることが最も復興に必要なことではないのでしょうか。

今回も福島県で紅葉鮮やかな景色の数々、温泉、蕎麦を始めとする美味しい食べ物を味わうことができたととても楽しかったです。

震災後、原発事故の影響を最も受けた県だからこそ、新たに様々な生活が福島で生まれることを願っています。